

作品タイトル「ニセイブツ」

著者 目次整理

【あらすじ】

「私」が大学生になって半年経った秋学期。平凡な大学生の私には少し変わった知人である「彼女」がいる。彼女は異星から来た異星人であり、私と昼食を供にする中でもある。私は彼女と過ごすうち、昼食時以外も彼女のことを観察し、私と彼女の違いは何か、なぜ供に過ごすのかを自身に問いかけていく。

特記事項

【概要】

現代の若者が抱える「平凡である」というありがちな悩みを持つ少女。そんな少女が異星人という特別な存在を観察し、改めて自身と他者の境界線について考える日常系 SF ストーリー。

本文文字数 2660字

【人物一覧表】

彼女（19）・・・大学生

私（19）・・・大学生

バイト先の先輩・・・フリーター

彼女の友達・・・大学生

【本文】

○大学校内（昼）

エントランス近くの長椅子に並んで座る私と彼女。膝に弁当箱を乗せて昼食をとっている。互いに弁当に顔を向け、視線が絡むことはない。

そばを通る人影はなく、周囲は静かである。

私 ≧ 「突然だが、彼女は人間ではない。

見た目こそ私たちと似ているが」

彼女がスプーンで弁当を突き、一口分持ち上げる。弁当の中にはドロリとしたゼリー上の何かが入っている。

私 ≧ 「食べるものが違う。」

彼女が青いゼリー状の物体を口に入れる

私 ≧ 「どうやら地球の食事は口に合わなかったらしい」

私 ≧ 「彼女は人間ではないが」

彼女が友達に呼びかけられる。視線を上にあげ、友人に気がつくど顔をあげ笑顔になる。

私「友達はある。私よりも多い。」

彼女の友人たちが少し離れた場所から手を振っている。

○大学の食堂(昼)

食堂で弁当を買う私。店員さんを見上げ、金を払い会釈をして割り箸を受け取ろうとしている。後ろの自販機では、彼女が自販機に小銭を入れようとしている。小銭の向きがよくわかっておらず、一向に入る気配がない。

私「彼女は人間ではない。正確には地球人ではない。彼女の出自については謎に包まれている。」

私が弁当と割り箸を受け取った後、後ろで小銭は大量に地面に落ちる音が聞こえる。私が驚いたように音がした方

を振り返る。

暗転

○大学中庭(昼)

大きなリュックサックを背負い歩く私。
友達同士で仲良さげに歩くグループや
男女で話しながら歩く二人組とすれ違
う。

私「以前、どこから来たのか尋ねてみたこ
とがある。一度目は何も答えてくれなくて。
二度目も」

私の後ろを黒い猫が横切る。

(回想)

○食堂内の机(昼)

大学校内で昼食を取る私と彼女。弁当
に入っていた卵焼きを一口食べた後、
しばらく箸を止める。弁当から顔を上
げた私は彼女へと何か話しかける。話
しかけられた彼女は、ワテンポ遅れ

て弁当から顔を上げる。私の方を向いて私の質問に答える。

彼女「遠いところ？」

私「と、いまいち具体性のない答えだ。また、いつか星に戻るのかと尋ねると、

彼女はニコリと笑い首をかしげる。

私「いつもはぐらかされる。」

(回想終了)

○ 大学中庭テラス席(昼)

私が、空いているテラス席を見つけ椅子の一つに荷物をおろす。隣の椅子に腰掛けた後リュックサックから紙に包まれたバケットサンドを取り出す。私はバケットサンドの横に頬杖をついてぼーっとする。

彼女(声)「にゃーん」

私が座っている丸テーブルのすぐ下で彼女が黒い野良猫に向かって手招きをしている。私が声に振り向くと、彼女

と私の目が合う。首を傾げた彼女はそのまま対面の席につき、トートバックからタッパーに入った青いゼリー上の物体を取り出す。

私 M 「彼女について、私が知っているのは、彼女が猫と友達、ゼリー状の何かをこよなく愛していること。それから、字が下手なこと。彼女からしたら異国、いや、異星の文字なのだから、仕方がないことなのだろう。」

私と彼女は同じテーブルでそれぞれ昼食をとっている。

(回想)

○大学の食堂(昼)

自販機から溢れ出る大量のお釣りを前に彼女は困惑した顔でこちらを見上げている。

私 M 「あと、金の使い方はよくわからないらしい。」

暗転

○講義室。

一人窓際で講義を受ける私。少し離れた場所で彼女とその友人たちが講義を受けている。

私の机には閉じたままの教材と、適当なページが開かれたノートが置かれている。

私≧「彼女は人間ではない。だが、大学生である。しかも、講義には必ず出席するタイプだ。」

頬杖をつき片手でペンをいじる私。講義に飽きて視線だけを窓の外にやる。

(回想)

○講義室

私≧「1限だろうが」

1限に遅刻する私。ボサボサの髪を抑

え、腰を低くしながら講義室に入ってくる。講義室の中央では彼女が背筋を伸ばし講義を受けている。

○私自宅

私「台風だろうが」

台風の日、部屋で講義をサボる私。

ベットに寝転がり SNS をぼんやりとスクロールしている。

『雨やば』というつぶやきとともに撮り写真が投稿されている。写真に写った講義室の真ん中で彼女が机に向かって座っている。

○居酒屋

私「朝まで飲み会だろうが」

居酒屋でアルバイトをする私。からになったグラスや皿をいくつか持って厨

房へと入る。疲労でげんなりとした顔を
している私に、アルバイト先の先輩
が話しかける。

バイト先の先輩「今日はもう上がっていいよ。

お疲れ様」

私「あ、はい。ありがとうございます。3卓
だけバッシング行ってきちやいますね。」

テーブル拭きと消毒液を持ってホール
に戻る私。少し離れたテーブルで、彼
女と、その友人らしき集団が飲み会を
している。まだまだ終わりそうにない
飲み会。時計に目をやれば、もうじき
午前3時になるところである。

○ 大学講義室

次の日。遅刻ギリギリであくびをしな
がら講義室に入る私。講義室中央に目
をやれば、いつもと同じ席に彼女がい
る。居酒屋にて飲み会をしていた時の
服装からトップスと髪型のみが変わっ

ている。

○大学 1階講義室前廊下。

私「休講だろうか。」

「休講の知らせ」と言う内容のメールを見てため息をつく私。ちらりと講義室を覗いた私は少し驚いたように立ち止まる。講義室内には、いつもと同じ席に一人で座っている彼女がいた。時間になっても生徒や教授がこないため、若干困惑した様子で周りを見渡している。ドア前で立ち止まり彼女の様子を伺う私。しばらく経つと、開かれた講義の窓から甲高く大きな声が聞こえる。彼女の友人が彼女に話しかけている。

彼女の友人「あー！ねーえー！」

窓へ顔を向ける彼女。私は教室の後ろ側から見ているため、彼女の表情は伺えない。大きく手を振る彼女の友人。窓へと近づく彼女を背に私はその場を

立ち去る（回想終了）。

○大学講義室

頬杖をつき窓から外を見下ろす私。視界の先には講義をサボってタバコを啜えながら談笑している男子生徒が数名いる。

私「その辺の地球人大学生よりもよっぽど大学生である。」

○大学校内

白い長椅子に二人が並んで座わり、昼食をとっている。彼女は弁当に集中しており、視線が絡むことはない。

私「彼女は、私とは違う。私も、彼女とは違う。」

彼女は友達が多くて、字が下手で、猫が好きだ。私と彼女の境界線は、なんだ？人かそうでないか？いや、最近生まれた国で分けることすらよしとされていないのだから、生ま

れた星なんかで分けるのは良くないだろうか。
彼女は、私といて楽しいのだろうか。私は、
彼女といて楽しいのだろうか。彼女は特別で
私は、地球人のうちの一人に過ぎないのだろ
うか。彼女にとって、私と彼らの境界線は存
在するのだろうか。」